

発行所

札幌市北区北15条西7丁目  
北大医学部同窓会  
TEL&FAX (011) 706-5007  
E-mail: furate@med.hokudai.ac.jp  
http://www.med.hokudai.ac.jp/~alum-w/

編集人 田中 伸哉  
発行人 浅香 正博

# 北大医学部同窓会新聞



## CONTENTS

- (1) ・新しい年を迎えて……………浅香 正博  
・年頭のご挨拶……………笠原 正典
- (2) ・医学部創立100周年記念事業の  
成功に向けて……………笠原 正典  
・教授退任のご挨拶……………三輪 聡一
- (3) ・教授就任のご挨拶……………清水 伸一  
・秋の褒章、叙勲  
石井 清一 前田 喜晴 高下 泰三  
・理事会・評議員会報告
- (4) ・エルムの仲間達へ⑥……………上杉 春雄  
・How I met myself  
一年と少しの海外生活を終えて  
……………宮岡 慎一
- (5) ・新世紀の医学に向けて(30)  
ピーター・シェーン 寶金 清博  
・フラテ103号発行のお知らせ
- (6) ・北海道大学 医学部  
創立100周年記念事業  
募金納入状況のお知らせ……………渥美 達也  
・総会、新入会員歓迎会のご案内  
・告知板  
・事務局からお知らせ
- (7) ・新刊書紹介
- (8) ・建物移転のお知らせと資料寄贈のお願い  
—大学文書館より—  
・北海道医学会からのお知らせ  
・投稿を募集  
・一面の建設予想図説明  
・ご逝去者  
・編集後記

## 「北海道大学医学部百年記念館建設予想図」



### 新しい年を迎えて

浅香 正博(48期)  
医学部同窓会会長

新年おめでとうございます。冬の寒さが厳しくなってきましたが、同窓会の皆様にはお変わりございませんか。昨年8月には、リオデジャネイロオリンピックが開催され、日本は金メダル12個を含む41個のメダルを獲得しました。いよいよ3年後には、東京でオリンピックが開催されますが、予算がどんどん拡張していき、それに伴う様々な問題が噴出して連日のようにマスクを賑わしております。オリンピックに引き続いて行われたパラリンピックは障害者のスポーツ大会として発足し、2004年のアテネ大会から夏季オリンピックと共同の開催になりましたが、障害者の方が臆することなく、精一杯自己ベストを目指して頑張っている姿に感動いたしました。わが国では長い間、障害者は世間に遠慮をしながら生きてきた印象があります。パラリンピックでは選手は障害のある部分を隠すことなく全力でプレーをして堂々とメダル争いを行っている様子をテレビで見ることができました。障害者の方のみならず全ての日本人が良い時代になってきたと感じたのではないのでしょうか。

北大医学部は2019年に創立100年を迎えます。100年という区切りはきわめて

大きく重いものであり、この年は、北大医学部同窓生にとって何よりも重要な年になると思われれます。100周年を迎える前にどうしても医学部同窓会が行なわなければならないことがありました。それは、先の大戦で亡くなられた医学部ならびに医学専門部の方々124名に対する追悼の式典であります。北大医学部の今日の繁栄はこれらの方々のご支援により、2016年7月2日に医学部戦没同窓生追悼式を挙行することができました。心より感謝申し上げます。

100周年記念行事のための寄付目標を10億円と定め、昨年4月より募金活動を開始しております。現在のところ、90周年の時より多くの寄付が集まっているようですが、目標に達するまでは安心できません。同窓会会員の皆様におかれましては100年に1度の大きなイベントの成功に是非ともご協力のほどよろしくお願い申し上げます。最後になりますが、北海道大学医学部同窓会会員の皆様方のご健康並びにご多幸を心からお祈りし、年頭のご挨拶といたします。



### 年頭のご挨拶

笠原 正典(56期)  
医学部長・医学研究科長

明けましておめでとうございます。会員の皆様には、お健やかに新春をお迎えのことと存じます。

昨年4月から、国立大学法人の第3期中期目標期間（平成33年度までの6年間）が始まりましたが、国からの運営費交付金がこの期間中、毎年1.6%ずつ減額されていくことになりました。これに伴い、北海道大学では平成29年度から教員数の大幅な削減を迫られている状況です。今や国立大学法人も自ら収入を確保し、財源の多元化を図ることが不可欠な時代になりました。医学部は外部資金の獲得において学内首位の実績を挙げていますが、自助努力により財政基盤のさらなる強化を図っていく必要性を痛感しております。

さて、予めからお知らせしていましたが、本年4月にいよいよ大学院組織が改組されることになりました。昭和30年に設置されて以来、長らく親しまれてきた大学院「医学研究科」は、大学院「医学研究院」（教員の所属組織）と大学院「医学院」（大学院学生の所属組織）として生まれ変わることになります。研究科を研究院と学院に分離するのは本学の基本方針であり、すでに多くの部局でそのような改組がなされておりますが、このたびは医学系の学院として医理工学院を新設するのを機に医学研究科の研

究院・学院化を決定したものです。また、今回の改組に伴い、長年の課題であった公衆衛生学コース（Master of Public Healthの学位を授与）を修士課程に新設することになり、大学院教育の一層の充実が期待されているところです。

本年、特に力を入れていかなければならないと考えておりますのは、平成31年に迎える医学部創立100周年への取り組みです。皆様には昨年4月に趣意書を差し上げ、事業の概要を説明申し上げるとともに寄附のお願いをさせていただきましたが、主要事業として医学部百年記念館の建設と教育研究基金の設立を計画しております。学内では記念事業実行委員会が中心となって活動を行っていますが、昨年夏に後援会が正式に発足し、医学部同窓会長の浅香正博先生に会長をお引き受けいただき、学外からもご支援をいただく体制が整いました。本事業は皆様のご支援なくして成功は望めません。事業の成功に向けて鋭意努力してまいりますので、よろしくご祈り申し上げます。

新年が皆様にとりまして希望に満ちた多き年となりますことをお祈り申し上げます。年頭のご挨拶といたします。

# 医学部創立100周年記念事業の成功に向けて

医学部長 <sup>かさはら</sup> 笠原 <sup>まさのり</sup> 正典 (56期)

医学部は平成31年に創立100周年を迎えます。これを機に記念事業を実施します。事業の概要については、本新聞の第152号において説明させていただきましたが、「北海道大学医学部百年記念館」の建築と、学部生・大学院生・教職員を支援する「教育研究基金」の設立が二本柱です。

百年記念館は医学部と同窓会がともに使用する施設として設計し、1階には医学部100年の歩みをたどる展示室、歴史資料を保管する資料室、応接室と談話室を兼ねた開放的なサロン、同窓会事務室を配置し、2階には会議、学会、同窓生の集いの場として利用できる会議室を設けます。これまで医学部では図書館の一角で歴史資料を保管してきましたが、スペースが限られていたこともあり貴重な歴史資料が散逸してきました。百年記念

館の建築により、歴史資料を展示・保管する体制を整備したいと考えています。また、同窓会員の皆様に気軽に利用していただける施設を学内に設けることにより、同窓会と医学部の距離を縮め、これまで以上に両組織の連携を深めたいと考えております。

年頭のご挨拶でも触れましたが、法人化以降、国立大学法人では大学運営の基盤となる運営費交付金の減額が続いております。この傾向は今後も基本的に変わらないと予想されます。このような状況下では、自ら資金を確保し、それにより教育研究環境の整備を行っていくことが不可欠です。今回、教育研究基金を設立することにしたのは、このような理由によるものです。

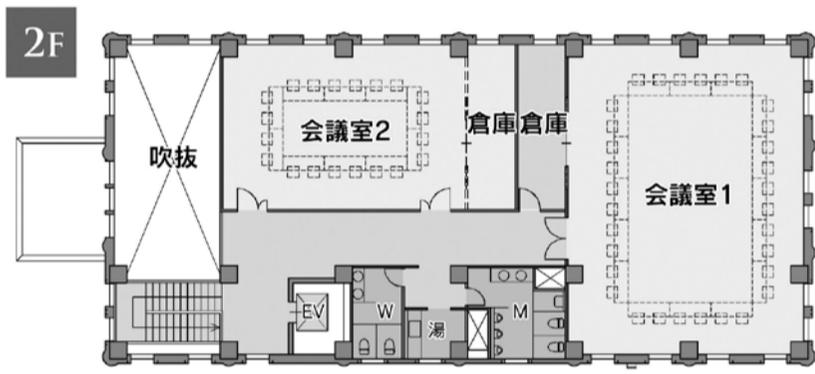
現在、学内では医学部創立100周年記念事業実行委員会（委員長：医学部長

の下に、募金活動、医学部百年記念館、百周年記念誌刊行、記念式典等、広報、展示品等の各小委員会を設けて活動を行っています。これまでは記念事業実行委員会、募金活動小委員会、医学部百年記念館小委員会を中心となって作業を進めてきましたが、記念事業に関する広報を担当する広報小委員会、医学部百年記念館に置く展示物や調度品、展示方法等を検討する展示品等小委員会も活動を始めています。まもなく、医学部創立100周年記念事業のホームページも開設されることになっており、今年から活動を加速させていく所存です。

昨年の夏には本事業を支援する組織として医学部創立100周年記念事業後援会を設立していただきました。同窓会長の浅香正博先生（北海道医療大学学長、北海道大学名誉教授、48期）に会長をお引

き受けいただき、齋藤和雄（北海道大学名誉教授、35期）、長瀬 清（北海道医師会会長、40期）、吉木 敬（北海道大学名誉教授、41期）、吉岡充弘（同窓会副会長、60期）の各先生に副会長をお引き受けいただきました。快くお引き受けくださいました先生方にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

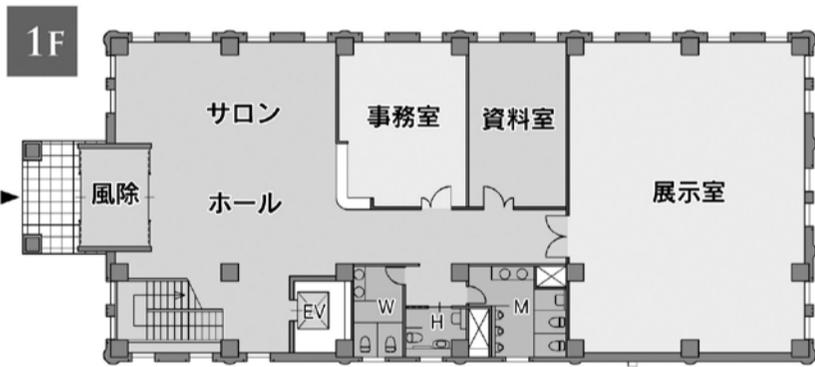
100周年は来し方を振り返り、次の100年を展望する良い機会であると思います。この100周年記念事業が北海道大学医学部の次の100年の発展に貢献するものとなることを願っております。医学部教職員一同、事業の成功に向けて努力してまいりますので、ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。



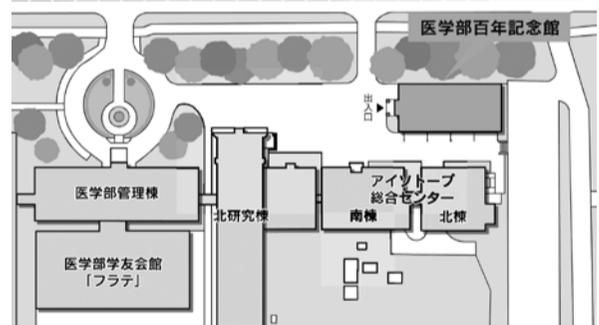
百年記念館 2階平面図



百年記念館 会議室イメージ図



百年記念館 1階平面図



百年記念館 建築位置

## 教授退任のご挨拶 北大での16年間を振り返る



みわ そういち  
三輪 聡一  
(会員2)

私は、2000年10月1日に細胞薬理学分野教授として就任し、2016年9月30日付けで退職致しました。予定日より半年早い退職で、医学研究科および所属分野の皆様には大変ご迷惑をおかけしたことをお詫び致します。また、丸16年間もの長い間お世話になり、大変有り難うございました。本分野は薬理学講座の2つ目の分野で、昭和51年に初代教授として菅野盛夫先生が就任され、私は2代目となり

ます。私は、本分野が創設されたのと同じ昭和51年に京都大学医学部を卒業し、脳神経外科での2年間の研修医を経て、大学院に入学し、薬理学で4年間研究に従事した後、薬理学第一講座（故藤原元始教授）の助手として採用され、異動まで京都大学で研究に従事しておりました。

着任時、分野ポストは教授1名・助教授1名・助手1名であり、教授を除くポストは埋まっていたため、自分の思い描く研究体制を構築できませんでした。そのため、最初の約4年間はこれまでの研究生活で最も低調な期間となり、今から思い返しても苦い思いが残っているばかりです。5年目位から、スタッフの人事が動き始めたのと、中央研究部との兼任ポ

ストを一つ頂いたため、ようやく研究活動を本格的に始めることができました。研究活動が本格化すると、研究の担い手である大学院生が足りなくなることが明らかになってきました。その原因は、博士課程入学者の絶対数が少ないことに加えて、各臨床科が地域医療支援のため拠点病院に大学院生としての医師を派遣しなければならないために、研究に従事できる大学院生の数が極めて少なくなっているからであると思います。そのような訳で、将来基礎医学研究に戻ってくることを期待して、医学部学生をリクルートすることに精を出し、一時は教室に10人位の学生が出入りしておりました。この16年間何とかやりくりを

してきましたが、必ずしも納得のいく研究成果を上げられたとは思えません。一方、学部教育に関しては、考えられる医師を育てるということを目指してきましたが、これに関してはほぼクリアできたのではないかと自負しています。いざれにしても、この16年間で教育・研究・管理などの面で貴重な経験をさせて頂くとともに、多くの医学部の学生さんと知り合いその成長を見守ることができたことを財産にして、第二の人生を始めたいと思います。

最後になりましたが、北海道大学大学院医学研究科および北海道大学病院の更なるご発展と皆様のご活躍を祈念致します。

## 教授就任のご挨拶

放射線治療  
医学分野教授しみず しんいち  
清水 伸一  
(71期)

平成28年10月1日付けで放射線治療医学分野の教授を拝命いたしました。謹んで新任のご挨拶を申し上げます。昭和24年若林勝教授主宰による放射線医学講座開講以来、入江五郎教授、宮坂和男教授、平成18年から白土博樹教授により、日本および世界の放射線診療をリードする歴代教授によって教室の歴史が継がれて参りました。平成24年には白土教授の兼任

により放射線治療医学分野が開講し、この度、同分野の教授を任ぜられました。歴史ある北海道大学のこれまでの業績を礎に、北海道大学を国際化の波の中へと乗り出す舵取りを担う教室運営の機会を頂戴しましたこと、大変光栄に感じておりますとともに、大海のごとき遙か針路を目前に身の引き締まる思いであります。

北海道大学医学部を卒業後、放射線科入局後、帯広・旭川厚生病院、北海道大学医学部附属病院での研修と同時に大学院生として研究の研鑽をさせて頂く機会を得ました。体内臓器の空間定位に関するテーマを頂き、世界初の動体追跡放射線治療装置の開発と実現に携わる機会を

得ました。学位を戴いた後は市立函館病院、恵佑会札幌病院を始め地域拠点・国内有数の第一線病院でがん診療の最前線に携わりました。平成19年より本学での診療と研究・教育に奉職の機会を得、現在に至ります。

平成26年開始の陽子線治療における本学施設の大きな特徴は、スキャニング法と実時間画像誘導機能を備える傑出した陽子線治療装置を開発した実績に加え、理学研究院、工学研究院、企業人等の理工系研究者が医療者と共に叡智を結集しがん治療技術の進化に手を取り合っていることです。この取り組みを基に国際連携教育局と連携し、スタンフォード大学

と医学物理サマースクールの共催、ジョンズ・ホプキンス大学、メイヨークリニック等との間で研究者、陽子線治療に係わる医療者の研修・教育の受入や研究・人材交流が行われています。

進取の気概に富む北海道大学の伝統と風土を相合わせ、平成29年開設の医理工学院に携わる教室として、新たな治療・機器の開発、多職種連携、国際化の拠点として邁進して参りたいと考えています。医学、医理工学の発展においては、同窓会、諸先生のお力添えなしには為し得ないものと心得ております。先生方におかれましては、ご指導ご鞭撻賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

## 秋の褒章、叙勲

## 瑞宝中綬章

札幌医科大学  
名誉教授いし い せい いち  
石井 清一  
(37期)

〔瑞宝中綬章を受章して〕

平成28年秋の叙勲にあたり、瑞宝中綬章受章の栄誉に浴しました。北大医学部と札幌医大時代を通じて、ご指導とご鞭撻をいただいた皆様からのご厚情を、身にしみ感じております。

私は昭和36年に北大を卒業し、東京の日赤中央病院でのインターンの後、昭和37年に島啓吾教授が主宰する北大整形外科講座の大学院に入学しました。大学院での研究は、骨腫瘍の組織培養を行い、

細胞遺伝学の立場から骨腫瘍の病態を観察するというものでした。細菌学教室の山田守英教授のご指導と同時に、染色体研究で世界の指導的役割を果たしておられた北大理学部動物学教室の牧野佐二郎教授の教えをいただくこともできました。

その後、島教授のご指示で昭和43年から1年間、米国Columbia大学のNew York Orthopedic HospitalのRobert E. Carroll先生のもとで「手の外科」を習いました。帰国後は上肢の外科と骨・軟部腫瘍の専門外来を担当させていただきましました。

昭和40年代の後半には、北大でもタイプライターによる頸肩腕障害や、演習林でのチェーンソーによる振動障害が問題になっておりました。保健センターに整形外科の診療科が置かれることになり、昭和51年に私が教授として派遣されるこ

とになりました。

昭和58年、私は河邨文一郎教授が初代教授の札幌医大整形外科教室の二代目教授として赴任しました。東大整形外科出身の河邨教授が昭和26年に創設した伝統のある教室であります。私は札幌医大での19年間、北大で身につけた整形外科を教室員に伝え、また私自身が河邨教授の整形外科を習得することで、教室員には2つの整形外科が伝わることを心掛けました。今、教室の畑では、蒔かれた種の一粒一粒がいつせいに芽を出し、勢いよく成長しております。

平成14年に大学を退職し14年が経ちました。保健センターの時に始めたジョギングをノルディックウォーキングに転向しましたが、体調は良好です。札幌医大同門の羊ヶ丘整形外科病院に時々顔を出

し、近所に住んでいる中高年者に「寝たきり予防」のためのノルディックウォーキングの効用を啓蒙しながら、高齢化社会のお役に立ちたいと考えております。

## 瑞宝小綬章

元伊達赤十字  
病院長まえ だ よし はる  
前田 喜晴  
(46期)

## 瑞宝双光章

学校医

たか した たい ぞう  
高下 泰三  
(32期)

## 理事会・評議員会報告

## 理事会

日 時：平成28年11月14日(月)  
午後6時から午後6時55分  
場 所：医学研究科 中会議室  
出 席：9名(会長、副会長1名、理事7名)  
同 席：監事1名、評議員会議長、副議長

## 評議員会

日 時：平成28年11月14日(月)  
午後7時から午後7時43分  
場 所：医学研究科  
北研究棟5階セミナー室  
出 席：54名  
(出席者15名、委任状提出者39名)  
同 席：会長、副会長1名、理事7名、  
監事1名

## 【協議事項】

1. 会則の一部改正について  
現行会則の字句及び文言を統一し規定の整備を図ることが、審議了承されました。
2. 平成27年度会計収支決算について

会計収支状況及び特別会計預金状況について、審議了承されました。

3. 平成27年度会計監査について  
会計監査結果について、審議了承されました。
4. 役員候補者選考方法の見直しについて  
現在、役員候補者選考委員会の委員は、同委員会を設置する際の評議員会に出席している評議員または予備評議員の中から指名することになっており、出席者が少ない場合など運用面で支障を来すため、出席していない評議員または予備評議員からも指名が可能となるよう現行方法を見直すことが、審議了承されました。

## 【報告事項】

1. 評議員、予備評議員の一部交代について  
平成28,29年度の2年間を任期とする評議員、予備評議員の一部交代について報告されました。
2. 平成28年度庶務、事業報告について

庶務報告として、本年度の定時総会及び第93期生新入会員歓迎会を平成29年2月13日(月)に札幌パークホテルで開催することが報告されました。

事業報告として、同窓会新聞の発行状況、会員名簿の進捗状況について報告されました。

3. 平成28年度会計収支中間報告について  
9月末日現在の会計収支状況について報告されました。
4. 平成29年度以降の会費免除について  
会則第6条第2項に基づき、昭和36年卒業の第37期生の会員は平成29年度以降の会費が免除となることが報告されました。
5. 会員の個人情報の提供について  
教育の質の改善を目的とする卒業生アンケート実施のため医学部長から、また、新専門医制度に向けたセミナー実施のため北大病院長から会員データの提供依頼があり、それぞれ該当する卒業期の会員データを提供したことが報告されました。

6. 医学部創立100周年記念事業について  
創立100周年記念事業基金の寄附状況について報告されました。

7. 医学部戦没同窓生追悼式について  
7月2日(土)に挙行した戦没同窓生追悼式の実施状況について報告されました。

8. 同窓会誌、会員名簿の広告カラー掲載について  
同窓会誌及び会員名簿の広告ページは、次回発行分からモノクロと併せてカラー掲載を実施することについて報告されました。

評議員会の冒頭、福田議長(52期)、小谷副議長(65期)、及び新任理事、監事のうち出席の武田理事(56期)、畠山理事(66期)、近理事(74期)、橋野監事(58期)から就任挨拶がありました。

# エルムの仲間達へ⑥ 2つの“profession”を追いかけて



札幌山の上病院  
院長

うえすぎ はるお  
上杉 春雄  
(67期)

67期、上杉です。神経内科医をやりながらピアニストとして演奏活動をしています。元々小学校もろくに行かずにピアノを弾いていましたが、高校受験の手前で将来「生きる」ということの根本にかかわる仕事がしたいと中学生相応に青臭く考えました。そして、呼吸や心臓の鼓動が途切れない、毎日ちゃんと食事をとって排泄する、そういう「地味で単調な繰り返し」が滞りなく行われて初めて、すべての活動が可能になる、だから、「地味で単調な繰り返し」が一番偉大なことであり、それを守る「医師」になろう、と考えたわけです。青臭いながら今でも自分はそう思っていますので、医学部に入った後、医者になることに迷ったことも、後悔したこともありません。

ただ人生というのは時々思わぬ展開を見せるもので、大学に入ってから次々と演奏会の機会が舞い込んできました。学部移行した後は演奏活動をやめるつもりだったのに、さらに予想外なことに演奏会の録音を聴いたEMIの制作部長が飛んできて「すぐに契約しよう」ということになり、わずか20歳、音大にも通っていないままメジャーデビューをし、サントリーホールや大阪シンフォニーホールでリサイタルをやったり、一流アーティストと共演する、などという学生時代を送ってしまいました。10代後半を受験勉強に費やしていたので、音楽家としての活動は本当に必死でこなしました。

卒後医者になることに迷いは無かったので、ピアノを置いて東京での研修生活をスタートしました。最初の数年間はピアノどころではなかったのですが、少しずつゆとりが出てくると、何しろ人生の大部分をピアノとともに生きていましたから、ピアノなしの生活に対する違和感がどんどん大きくなってしまいました。それで大学院に入った時に小さなピアノを買って、音楽の勉強も再開しました。

大学院修了後留学から直接札幌に

戻ってきてから演奏活動を再開しましたけれど、医師として働きながらの活動ですから、「こんなことやっていいのかわからない」という自問は常にありました。ですから、「音楽については音楽のプロとして、医者としてはプロの医者として」それぞれちゃんとした仕事をする努力をしてきたつもりですが、所詮一人の人間がやっていることですから、別々のプロとして生きるのは結構ストレスもありました。でもがんばっているとよいこともあるもので、音楽からもらっているものは少なくないですね。40歳を機に、ピアニストとしてバッハ研究と演奏をライフワークにしようと思って取り組んできて、だんだんバッハの心の壁に入り込むように音符を通して対話を続ける中で、日々の苦労をバッハと共有することで癒されるような気がしたり、また一流の演奏家とのステージでは音楽に向かう姿勢の厳しさに背筋が伸びる想いをしたり。そんな苦労をしているうち、数年前に出したバッハのCDが批評家特選盤に選ばれる

など、いつの間にかそれなりに業界でも評価をいただけるようになりました。

つい先日、音楽家としての僕を高く評価している友人が企画して東洋経済オンラインというところからインタビュー記事が出ました。二つの道のプロ、というような切り口ですけど、もともとamateurという言葉は愛amoreと同源ですから、愛しているという意味ではプロもアマもありません。ただ僕の場合は演奏のステージや共演者がいわゆるプロのそれと同じというだけの違いです。実は普通の職業はoccupationであり、「司祭・弁護士・医師(内科医)」だけがprofessionと呼ばれたそうです。これは、知識などを人の前pro-で話してfessお金をもらうということの意味するそうですが、社会学者のMax=Weberによれば、そこに「神によって予めpro-宣言されたfess生き方」というニュアンスがある、とのこと。要するに、自分のこの生き方は神によって決められたものだ、と受け入れるかどうかプロの定義と理解しました。

ピアノ弾きで世の中に出ることによって、いわば芸人としての苦労もしていたので、医者としては初心を忘れず、地味で目立たぬように仕事をしていく積もりでした。しかしまたまた人生に思いもかけぬ転機があり、修行時代に一番お世話になった恩師に強く誘われ、突然院長職などをやることになりました。それはそれで相当に苦労をしています。もっと医者としてしっかりと仕事をしてくればよかった、と思ったり、音楽家としてもっと違う生き方をしたかったと思うこともありますけれど、一つに絞ったところでどっちも今程度にしかできなかったようにも思います。それも含めて結局自分はこの人生しか歩めなかったんじゃないかなって、心底思えるようになってきました。

そういう意味で、だんだん自分はプロに近づいているかなあと思ったりしています。



兵庫県立芸術文化センターでのリサイタルにて



2016年7月20日、東京ハクジュホールでのリサイタル終了後の写真  
筆者から右に共演者の川本嘉子(ヴィオラ)、小菅優(ピアノ)、吉野直子(ハーブ)、大萩康司(ギター)らと。



2015年7月22日、オーストリア・バッハ城コンサート後  
左よりG.Sima(ウィーン国立歌劇場専属歌手)、筆者、城主ご夫妻、A.Skocic(元ウィーンフィル首席チェリスト)、S.Skocic(オーボエ奏者)



オーストリア・バッハ城コンサートにて。G.Simaの伴奏中

# How I met myself 一年と少しの海外生活を終えて



みや おか しんいち  
宮岡 慎一  
(医学科4年)

高校時代は生徒会や部活に励む傍ら、数学に強い関心を持ち、高校一年生の頃には「将来は数学者になってやろう」と気胸で入院中の病院の中で言ってい

たりました。英語は最も苦手な科目。大学に入るために必要なので仕方なく勉強していた。生物学はセンター試験(旧共通一次)で必要だったが授業はなかったため、独学で。入試本番、面接で覚えているのは「気胸でお世話になった岩見沢市立病院の外科の先生にあこがれて医学部に来た」と言ったこと。そして晴れて北大医学部に入学したのが、ちょうど3年と半年前の出来事である。

さて、そんな3年以上前の自分が、こうしてアメリカのウィスコンシン州にあるウィスコンシン大学マディソン校で癌や感染症を中心として生物学に関する論文をひたすら読み込み、その後約5か月間にわたってヨーロッパ、アフリカを中心に旅行してまわっているということを予想できたかというところが当然そんなことはない。現在の趣味は海外旅行、そして外国語学習。そんなこ

とを高校生だったころの自分が聞いたらすごく驚くだろうと思う。

こんなふうな、例えば自分が3年後にどこで何をしているかというのを予想するのは大変難しい。言い換えると、予想することは簡単だけど、いざ自分の予想は正しかったかを見てみると、必ずしもその予想が当たっているとは限らない。むしろ、現在自分がいる場所やしていることというのは、3年前の

自分が考えもしなかったものであることの方が多いのかもしれない。

なので、私はこう思う。3年先、1年先、極端な話、明日のことですら言ってしまうと何が起るかわからない。なので、明確な（そしてその出所が自分自身である）目標がないのであれば、どうせ予想と違う未来について悩むのではなく、現在の状況に集中すべきなのではないか。遠くを見てばかりで

はなく、「今」の自分に集中した先には、予想と違って、そして予想を超えて面白いものと出会えるのではないか。

ボスニアで一日一本のバスを乗り過ごした。宿を延泊したその日の夜、アルゼンチン人の女性と出会った。そこではじめて学んだスペイン語。そして現在、自分はスペインにいる。そんなこともある。予想していなかった「今」というのは、これはこれで大変面白い。



# 新世紀の医学に向けて (30)

## 北海道大学病院国際医療部

北海道大学病院  
国際医療部 准教授  
ピーター・シェーン



北海道大学病院  
病院長  
寶金 清博 (55期)



北海道大学病院では、病院の国際化を推進し、高度で先進的な医療の国際競争力を強化することを目的として、平成26年7月に国際医療部が新設された。医療を新たな成長産業として振興する政府の方針があるなか、我々が担う役割は、『インバウンド』『アウトバウンド』『国際交流』という3つの柱に集約できる。最初の柱である『インバウンド』は主に海外の患者に日本の医療サービスを提供することを表す。希望する医療を受ける目的での来日が脚光を浴びている今般、実状を見渡すとツーリズム目的の健診が増えているのが目立つ。しかし、医療ツーリズムではなく、渡航医療における特定機能病院の責務は、海外で受診が困難な高度医療を提供することであり、それは重要な国際社会への貢献であると考えている。自明ではあるが、国内の医療体制及び皆保険制度を脅かすような国際化は主客転倒である。

外国人患者を受け入れるにあたって、改めて病院として基本的な機能を国際化と照らし合わせ、多くの準備が必要となってくる。例えば、院内表記、資料、ウェブサイトの多言語化や、宗教・文化の違いに配慮した食事や礼拝場所などの施設的な対応が挙げられる。このような準備を一つずつ進めながら、医

療サービスを外国人が安心・安全に享受できる体制を保証する外国人患者受入れ医療機関認証 (JIMP) の取得も視野に入れて活動している。

北海道大学病院では治療目的の患者『インバウンド』とは別に、教育目的の医療人『インバウンド』に関する取組も始めている。具体的に、最先端の日本の医療技術・知識の習得機会を提供するという取り組みであるが、例えば昨年11月にはフィリピンの内科医会からの要請を受けて糖尿病のセミナーを実施した。参加した医師達はこのセミナーへの参加を自国における生涯教育単位として認められた。また、今年11月には上海の市立病院群のために医療制度と病院マネジメントの研修を予定している。このような教育プログラムは、医療事情が異なる各国の医師達の需要に応じられるよう、オーダーメイドで対応している。自国内で十分な生涯教育を受けることが困難な国もあるなか、今後、北海道大学病院が海外の医療従事者にとって教育の拠点となることを期待している。

2つ目の柱である『アウトバウンド』は、世界へ向けて日本の医療技術を輸出できる最先端の港となることを目指しており、現在、陽子線治療センターや、

がん遺伝子診断部を始め、医療技術や医療機器に興味を持つ国や地域からの視察団の受け入れなどを行っている。今後の計画としては、海外の医療機関などと連携した展開を想定している。

3つ目の『国際交流』であるが、上記2つの取り組みを含め、海外の医療機関との連携や協力体制を構築していくことで、研究や診療分野での最新情報が多方向で共有され、各国各分野の医療の発展に繋がるための取り組みを進めている。各国が直面する課題は様々に異なるが、多くの医療者が疾患領域を超えて繋がり、顔が見える交流を増やしていくことによって、医療の進化を世界的に深めていくことが可能だと考えている。今年、新たにスペインのバルセロナ大学病院と学術交流協定を締結しており、更に北米、ロシア、東南アジア諸国の医療機関との学術交流を深めるプラットフォーム作りを進めている。また、ある特定分野で卓越した能力を有する医療機関は必ずしも大学病院相当とは限らないため、医育機関同士の交流に囚われない新たな連携の枠組みも検証中である。

北海道におけるあらゆる分野の国際交流で必ず意識しなければならないのが極東ロシアである。特にサハリン州

は最短距離で50kmもない一番近くの隣国であり、更には密接に繋がった歴史を共有している地域でもある。医療本位の『国際交流』に関しても露国に特段の配慮が必要なのは、政府の方針としても明確であり、9月2日にウラジオストクで開催された東方経済フォーラムで「医療水準の向上によるロシア国民の健康寿命伸長」を目的に医療分野の協力が表明された。この命題に取り組むべく、ユジノサハリンスクより10名の医師を招き、10月28日に北海道-サハリン州がんシンポジウムを主催した。また、前週の22日には国際医療に積極的に取り組んでいる道内医療機関を中心に情報交換を意図とした北海道国際医療ネットワークを主催した。

最後に、昨年10月より国立大学附属病院長会議にて「医療の国際化」というミッションを牽引する大役を担った。従来、地域医療や医学教育を牽引してきた北海道大学病院ではあるが、大学病院としての未来像を描いた際に、国内いずれの医育機関も国際化を避けては通れない。この機会をチャンスと捉えるべく、国際医療部の体制強化に向けて他の国立大学病院との連携を強化し、国内外の枠を取り払い、世界に向けて日本の医療の価値を発信する場所であることを目指す。

### フラテ103号発行のお知らせ

医学部フラテ編集部

同窓会新聞をご覧の皆様、いつも学友会誌フラテをご購読いただき、誠にありがとうございます。皆様の暖かいご支援により、昨年発行の102号も大変ご好評をいただきました。

さて我々フラテ編集部では、今年度もフラテ発行に向けて準備を進めております。103号の発行は、今年3月上旬を予定しております。購読をご希望の方は、同封の振込用紙にてお支払いをお願い致します。注文および支払方法を、郵便振込みによる前払いとさせていただきます。在

校生につきましては、4月上旬にフラテを一部ずつ配布致しますので、別途お振込は必要ございません。

また、当編集部には102号以前の残部もございます。ご希望の方は、103号をお申し込みの際に、振込用紙にその旨をお書き添え下さい。別途、送らせていただきます。

なお、フラテの申し込みは11月と1月の2回のほか、102号巻末の払込用紙においても受け付けております。**すでに102号巻末の振込用紙にて申し込まれた方、11月の同窓会新聞に同封致しました振込用紙にて申し込まれた方は今回申し**

**込む必要はございません。二重申し込みをなさらないようご注意ください。**

また、同窓会新聞や同窓会費についてのお問い合わせは同窓会 (011-706-5007) へご連絡をお願い致します。

<103号の主な内容>

- ・特集記事「新専門医制度について (仮)」
- 「消化器内視鏡医療の進む道 (仮)」
- 「Paradigm Shift—Science Based Medicine が拓く医療 (仮)」
- ・フラテ各地に行く～兵庫 (神戸) 編～
- ・教室便り (医学部の各教室のご紹介)
- ・学年紹介 (学生の他己紹介)
- ・各講座新旧名称一覧
- ・フラテ茶苑 (先生方の御寄稿文)
- ・学生の広場 (学生の寄稿文)

・みどりのベンチ～となりの女性医師～腫瘍病理学分野講師 谷野美智枝先生インタビュー

・新任教授 衛生学・細胞予防医学分野 西浦博先生インタビュー

※フラテ編集部へのご連絡・ご照会は下記宛にお寄せくださるよう、お願い申し上げます。

<お問い合わせ先>

フラテ編集部  
TEL/FAX 011-736-1444 (留守電あります)  
E-mail: frate.med@gmail.com  
〒060-8638  
札幌市北区北15条西7丁目  
北海道大学医学部内 フラテ編集部

# 北海道大学 医学部 創立100周年記念事業 募金納入状況のお知らせ

医学部創立100周年記念事業実行委員会  
募金活動小委員会副委員長

渥美 達也 (64期)

## 北海道大学医学部創立100周年記念事業基金 寄附受入状況

寄附者合計	件数	金額(円)	平成28年9月30日現在	
			趣意書発送数 (件数/発送数)	
寄附者合計	285	135,730,636	-	-
○教員(医学部医学科、病院)	76	14,360,000	646	11.8%
教授	17	7,300,000	44	38.6%
准教授	8	1,600,000	48	16.7%
講師	6	1,150,000	41	14.6%
助教	20	2,210,000	168	11.9%
特任教授	2	400,000	6	33.3%
特任准教授	1	300,000	7	14.3%
特任講師	0	0	10	0.0%
特任助教	6	600,000	58	10.3%
助手	0	0	3	0.0%
医員	16	800,000	261	6.1%
○同窓生(教員除く)	170	58,042,000	5007	3.4%
○病院・医療法人等	17	32,940,000	-	-
○分野・講座等	1	15,803,636	-	-
○同期会	1	3,425,000	-	-
○学生の保護者、篤志家、 名誉教授(同窓生除く)	20	11,160,000	※学生の保護者 は676	-

医学部創立100周年記念事業に向けて、平成28年4月末に募金活動がスタートいたしました。

同年9月末日現在の募金受け入れ状況は、1億3,573万円となっており、その詳細は表のとおりであります。

これまでに現医学部教員はもとより同窓会会員の皆様、また病院・医療法人等関係各方面から多額の寄附をいただきました。紙面をお借りしまして、心より厚くお礼申し上げます。

2019年(平成31年)の創立100周年記念事業を推進するには、募金目標額10億円の早期達成は悲願となっております。記念事業は3つほどありますが、特に大きな柱であります「北海道大学医学部百年記念館」の建設は、同窓会行事、医学

部の歴史資料の展示、学会、会議など、同窓会会員の皆様が発揮できる多目的な施設として、現在のアイソトープ総合センター北棟向かいに2018年度(平成30年度)に着工予定となっております。

同窓会会員の皆様におかれましては、この募金目標額の早期達成のため、なお一層のご理解とご協力を心よりお願い申し上げます。



## 総会、新入会員歓迎会のご案内

### 同窓会総会

平成28年度定時総会を下記により開催しますので、ご出席くださるようご案内いたします。  
日時：平成29年2月13日(月)  
午後6時より  
会場：札幌パークホテル 高砂(3階)  
所在地：札幌市中央区南10条西3丁目

電話：011-511-3131

議事

- 協議事項(予定)
  - 会則の一部改正
  - 平成27年度会計収支決算
  - 平成27年度会計監査
  - その他

### 2. 報告事項(予定)

- (1)庶務・事業報告
- (2)平成28年度会計収支中間報告
- (3)その他

総会終了後、平成28年度フラテ研究奨励賞授賞式を予定しています。

### 新入会員歓迎会

総会終了後の午後7時より、同ホテル(1階)ザ・テラスルームにおいて、第93期生の入会歓迎会を開催します(参加費は無料)。

ご参加いただける方は、電話又はメールにより2月1日(水)までに同窓会事務局へご連絡ください。

## 告知板

### <教授就任ご挨拶>

札幌医科大学医学部法医学講座  
渡邊 智 (62期)



平成28年9月1日付で上記就任いたしました。北大医学部を卒業後、第2外科に入局し消化器外科学を専門とし、阿部和厚教授に教鞭を頂いて膵臓の研究を開始しました。細胞組織学講座の教員を経て、寺沢浩一教

授のもとで平成15年より法医学を開始し現在に至っています。先生方には大変お世話になりました。法医学講座を主宰するにあたり、最も重要な課題は後進の育成にあると考えています。法医学実務を基盤とした研究遂行能力のある法医学者の養成に碎身の努力を傾注して参りたいと存じますので、今後とも、ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

### <学内・院内人事異動>

#### <辞職>

平成28年12月31日 小林健太郎(84期) 核医学診療科特任助教(小樽市立病院放射線診断科)

#### <採用>

平成28年12月1日 林 秀幸(82期) がん遺伝子診断部特任助教  
平成29年1月1日 真鍋 治(80期) 核医学分野特任助教

#### <昇任>

平成28年10月1日 清水 伸一(71期) 放射線治療医学分野教授(同分野准教授)

#### <所属換>

平成28年10月1日 宮島 直人(75期) 泌尿器科助教(血液浄化部助教)

### <第43期卒後50周年記念祝賀会のお知らせ>

前夜祭：平成29年7月15日(土) 北大ファカルティハウス「エンレイソウ」、祝賀会：同16日(日) 札幌プリンスホテルタワー 28階「トリアノン」を予定。  
問い合わせ先：青柳 俊、三上 一成

詳しい案内(出欠葉書など)は6月にお届けしますが、皆さんのスケジュールに入れて下さるようお願いいたします。  
三上 一成、三上整形外科医院  
電話 011-851-0101  
メール：mikami 33@coral.ocn.ne.jp

### <医学部79期医師15年目記念同期会>

2017年秋に医師15年目を記念して同期会開催を予定しています。詳細はFacebookなどで検討中です。

庄野または齋藤(晶)までお問い合わせください。

### <平成28年度 北大医学部 東京フラテ会総会のご案内>

平成28年度の東京フラテ会総会を、下記のとおり開催します。同期知友をお誘いあわせの上、ご出席くださいますようお願い申し上げます。

講演会：午後5時30分から6時30分 203号室  
<講師：東京医科大学 精神医学分野 主任教授 井上猛先生(60期)>  
議 事：午後6時30分から6時45分  
懇親会：午後7時00分から 202号室

日時：平成29年3月18日(土) 午後5時受付開始  
会場：学士会館 2階  
東京都千代田区神田錦町3-28  
Tel 03-3292-5936  
会費：12,000円、但し新卒から82期までは5,000円

東京フラテ会 会長 松谷 有希雄

【問い合わせ】事務局 武蔵村山病院 鹿取 正道  
Tel 042-566-3111 (代)  
e-mail：mkatori@yamatokai.or.jp

## 事務局からお知らせ

### ご寄付のお願い

企業、団体、個人の皆様に、同窓会事業支援のためのご寄付をお願いしております。

寄付者ご本人のご了承を得て同窓会新聞にご紹介し、10万円以上のご寄付には、楯または額による感謝状を贈呈

させていただきます。  
ご寄付につきましては、同窓会事務局にご連絡ください。  
電話：011-706-5007  
E-mail：furate@med.hokudai.ac.jp

### 会員名簿の処分にお困りの方へ

会員名簿には個人情報に掲載されていますので、ご不用になった名簿は、例えばシュレッダー処分または焼却処分をするようお願いいたします。処分が困難な方は、郵便又は宅配便により同窓会事務局へ送ってください。

なお、恐縮ですが送料は各自でご負担願います。

【送付先】〒060-8638  
札幌市北区北15条西7丁目  
北大医学部内  
北海道大学医学部同窓会事務局

### 同窓会費について

#### ○会費納入のお願い

会員の皆様には、会費納入にご協力いただきありがとうございます。

同窓会の事業は皆様の会費によって運営されています。今後も意義ある同窓会活動を継続していくために、会費納入にご理解とご協力をお願い申し上げます。

#### ○会費納入方法

①口座振替、②コンビニ納入、③銀行振込のいずれかによります。

※詳しくは同窓会新聞に同封される払込票をご覧ください。

#### ○会費未納者と刊行物の送付

・未納会費が2年を超える会員には、会

員名簿(同窓会誌)をお送りしません。

・納入が9月30日を過ぎると、入金確認及び印刷部数確定の都合によりお送りすることができません。

#### ○会費免除者と刊行物の送付

・会則により、卒業後55年を経過した会員の会費は、翌年度から免除とな

ります。

・37期生は平成29年度から、38期生は平成30年度の会費から免除となりますが、免除前に2年を超える未納会費がある方には、会員名簿(同窓会誌)をお送りしません。

### ドクター総合補償制度のご案内

同窓会では、「ドクター総合補償制度」を創設し、現在、500名近い会員が加入して、ご好評をいただいています。

本制度には「医師賠償責任保険(勤

務医向け)、「医療・がん保険」、「所得補償保険」があり、団体割引が適用されるので割安な保険料で加入することができます。

年度途中でも加入できますので、同窓会事務局にお問い合わせください。

電話 : 011-706-5007

E-mail : furate@med.hokudai.ac.jp



### 新刊書紹介



#### 「糖尿病・透析の人に役立つ『足病』の教科書

おわら たけひこ  
大浦 武彦(33期)他著  
三五館  
¥1,512

形成外科名誉教授大浦武彦先生らが著した本書は、「足病」についてわかりやすく説いた初めての本である。

足病は糖尿病や透析の合併症の一つである。血管障害や神経障害によって

生じた糖尿病・透析患者の足潰瘍は難治性であり、時に下肢を切断せざるを得ない。透析患者の大腿切断後の1年、5年生存率はそれぞれ50%、15%程度であり、極めて予後が悪い。現在国内の透析患者は32万人とされ、透析導入の原因疾患の第1位は糖尿病である。糖尿病・透析患者の足病が今後増加することは明白であるが、十分な重症化予防策、治療体制が整えられているとはいえないのが現状であった。

形成外科のパイオニアである大浦先生は、1995年の退官後も情熱衰えることなく業界をリードしてきた。足病に対しても2010年に日本下肢救済・足病学会を創設するなどいち早く取り組み始めた。医師でもある共著者の秋野公造参議院議員らと共同し、2016年度診療報酬改定において「下肢末梢動脈疾患指導管理加算」が実現に至り、遂に、国の支援による医療体制の整備が始まったのである。

本書は患者さんや一般の方にわかりやすいように大浦先生と秋野議員との対談形式をとっているが、足病の疫学、病態、治療等について網羅的に詳述されており、内容は専門書と比較しても遜色ない。高齢化社会、生活習慣病患者の増加、と足病がやがて医療問題化することが予想される今、必読の一冊である。

(73期 村尾尚規)



#### 「健康・安全で働き甲斐のある職場をつくる」

さし れい こ  
岸 玲子(47期)他編著  
ミネルヴァ書房  
¥3,672

長時間労働、非正規雇用者、ブラック企業、ワーキングプア、過労死、メンタルヘルスの悪化、過労自殺、等々…日本における雇用労働問題は、今、きわめて深刻な状況になっている。

このような事態のなかで、日本学術会議は、2011年4月に、提言「労働・雇用と安全衛生に関わるシステムの再構築を一働く人の健康で安寧な生活を確保するために」を公表した。同会議が雇用や労働者の健康や安全を守る視点で提言したのはこれが初めてであるが、この提言は、政策、企業活動、労働者の働き方の改善に生かされるべき重要なものといえる。岸玲子先生は、日本学術会議のすべての部の協力の下

に構成された「労働雇用環境と働く人の生活・健康・安全委員会」の委員長として、この提言をまとめられた。

本書は、この提言をわかりやすく解説し、社会への普及・啓蒙を図ろうと、提言には入らなかった問題も取り上げ、読みやすい単行本として刊行されたものである。内容は、①今、雇用の場で何が起きているのか、②職場の環境安全問題とリスク管理・マネジメント、③労働と関係する病気の予防と働く人の健

康問題、④これからの職域保健サービスのあり方、⑤新しい取り組みの強化、に分けられ、それぞれが5～7章から構成され、編著者の岸先生をはじめ多彩な専門家が執筆されている。現代人の健康状態の理解には、労働・雇用状況を知ることが必須、そのためにも、ぜひ、本書のご一読をおすすめしたい。

(41期 福地保馬)



#### 「名医が伝えるシリーズ アキレス腱断裂の治療」

うちやま えいじ  
内山 英司(57期)著  
運動と医学の出版社  
¥4,104

トップアスリートのアキレス腱断裂に早期復帰を約束する内山法(Half-Mini-Bunnell法)

アキレス腱の手術法には様々な方法がありますが、早期に確実な復帰を望

むアスリートに対して、どんな方法が良いかを追求したのが、北大57期の内山英司先生です。内山先生は北大医学部時代にバスケットボール部の黄金時代を担った優れた選手でした。スポーツ医学を志し、東京大学にてスポーツ整形外科を学んだ後に、関東労災病院スポーツ整形外科部長として沢山のアスリートの手術を専門に行ってきました。豊富なご経験を踏まえてアキレス腱断裂に対するHalf-Mini-Bunnell法

(内山法)を確立されました。内山法を行えば、術後4-5日から全荷重歩行、10週からジョギング、5か月でスポーツ復帰が可能となります。1日でも早い復帰を望むトップアスリートに最適です。実際に早期復帰を果たしたスポーツ選手から選手への口コミによって、内山先生のもとには全国から手術患者が集まって来ます。また、トップアスリートに限らず、中高年のスポーツ愛好家にも内山法は有用です。内山法はアキ

レス腱断裂治療の最新にして最善の方法です。私も10年前から行っており、今では日本のみならず、世界中で広まっています。本書はその豊富なご経験を率直に述べられた金言集であり、全てが書かれております。直ぐに役立つ実践的なものですので、ぜひ皆様の書棚に備えておくことをお勧めします。

(59期 高原政利)



#### 「スピリチュアル・コミュニケーション」医療者のための5つの準備・7つの心得・8つのポイント

おかもと たくや  
岡本 拓也(76期)  
医学書院  
¥2,700

「先なるものは後に、後なるものは先に」という言葉の通り、わが「まさじいゼミ」の1期生岡本拓也君はすでに3

冊の著作を上梓しています。『わかりやすい構造構成理論 緩和ケアの本質を解く』(2012年11月)『誰も教えてくれなかったスピリチュアルケア』(2014年4月)そして最新刊が本書です(2016年3月)。

岡本君は76期生で卒業は2000年。緩和ケア医をめざして各地で修行し、現在は道内でも数少ない緩和医療専門医として胆振西部で在宅医療に専念して

います。

処女作はスピリチュアルケアの枠組みについて構造構成理論を用いて語り、やや難解だが挑戦する価値あり。第二作ではスピリチュアルケアは緩和ケアばかりでなく、人間誰もがスピリチュアリティを持っているので、あらゆるケアに必要なことを示し、本書はそのスピリチュアルケアの具体的方法

をコミュニケーション技法に沿って論じたものです。真心を込めて患者さんと向き合ってきた岡本君ならではのユニークな智慧が克明に描かれています。

著者の医学部入学前、京大法学部卒業後少年院での法務教官としての経験が活かされているように思えてなりません。

(会員2 前沢政次)

# 建物移転のお知らせと資料寄贈のお願い —大学文書館より—

だいがくぶんしょかん

北海道大学大学文書館は、2016年4月にクラーク会館西隣の建物(旧留学生センター建物)に移転しました。新しい建物には、資料収蔵庫7室、閲覧室、資料展示ホール等を備え、北海道大学に関する歴史的な資料を体系的に収集・整理して適切に保存していくことが可能となりました。今後も資料閲覧や展示観覧等の利用がしやすく、多くの方々にご来館いただける施設となるよう努めて参ります。お近くにお越しの際には、是非、お立ち寄り下さい。

大学文書館ではこれまでに、卒業生及びそのご家族の方々、学内の各部署・部署・研究室及び教職員の方々から、多くの資料をご寄贈いただいております。学生時代のノート・学生証・証書・通知類、研究室や部・サークルの日記・刊行物、教員の研究記録・各種会議資料・辞令類、その他に日記、書簡、写真・卒業記念アルバム、墨蹟、記念品など、お手元で大切に保管されているさまざまなものが、時代時代の北海道大学や医学部の様子を後世に伝える資料となります。

昨年は、社会医学講座法医学分野研究室から、故寺沢浩一教授旧蔵資料のご寄贈いただきました。1960年代後半の医学部写真、発令通知類、『写真集北大医学部90年』編纂関係資料などです。その他にも、鈴木重統氏(39期)から受験票や鈴木重雄氏(6期)旧蔵の『白揺』を、吉尾弘氏(医専4期)から在学期の通知類やアルバムなどを、近藤角五郎氏(9期)のご家族からは受講ノート・アルバムを、立野誠吾氏(12期)・榛谷四郎氏(13期)のご家族からはアルバムをご寄贈いただいております。

資料のご寄贈をお考えの方、資料の情報をお持ちの方は、大学文書館へご一報をお願いします。

### 《ご連絡先》

北海道大学大学文書館

〔住所〕〒060-0808

札幌市北区北8条西8丁目

〔開館〕平日9:30~16:30

〔電話〕011-706-2395(FAX兼)

〔E-mail〕

archives@general.hokudai.ac.jp

〔URL〕

http://www.hokudai.ac.jp/bunsyo/



旧法医学教室の教室(1960年代)



旧法医学教室(1960年代)



旧附属病院(1960年代)



大学文書館(外観)

## 北海道医学会からお知らせ

### ○北海道医学会ホームページURL

北海道医学会のホームページを開設しました。下記URLよりご覧ください。

<http://www.med.hokudai.ac.jp/hms/>

### ○北海道医学会について

北海道医学会は北海道における医学の進展を図るため、大正12年に発足した学術団体です。北海道大学、札幌医科大学、旭川医科大学の医師、医学研究者及び本会の目的に賛同される方々には一般会員として、道内の主要医療機関には特別会員として、本会に功績のあった方々には名誉会員としてご参加いただいております。

### ○主な活動内容

・機関誌「北海道医学雑誌」の発行

(5月、11月：平成29年は第92巻)

- ・学術集会「市民公開シンポジウム」の開催(10月下旬：昭和41年から実施)
- ・若手研究者への「研究奨励賞」の授与(年3名以内に賞状及び副賞：昭和58年から実施)

### ○入会のご案内

本会に入会されていない同窓会員におかれましては、是非ご入会いただきますようご案内申し上げます。医療機関としてのご入会も歓迎します。

なお、会員には機関誌「北海道医学雑誌」を発行の都度お届けいたします。

入会方法、申込書は、本会ホームページ(コンテンツ：入会ご案内)より入手してください。

### ○「北海道医学雑誌」の原稿募集

- ・募集する原稿は、「原著論文」「症例報告」「総説」「速報」「学位論文」「学位論文の要旨」「BAY(Best Articles of the Year)」「研究会抄録」「談話会抄録」等です。
- ・「教室だより」「海外だより」等、論文以外の投稿も歓迎します。
- ・投稿者は北海道医学会会員であることを原則とします。
- ・投稿規定は、本会ホームページ(コンテンツ：機関誌「北海道医学雑誌」)をご覧ください。

### ○お問い合わせ先

北海道医学会事務局

電話：011-706-5007

E-mail：digakkai@med.hokudai.ac.jp

## 投稿を募集

医学部創立100周年に向け、シリーズ「思い出の写真」の投稿を、下記の要領で募集いたします。掲載号および掲載順につきましては、編集委員会にご一任くださいますよう、よろしくお願いいたします。

- 1.写真1枚(タイトルをおつけください)をお貸しください。
- 2.本文300字以内でお願いいたします。
- 3.事務局宛にメールあるいは郵送でお送りください。

## 一面の建設予想図説明

医学部創立100周年を記念し、アイソトープ総合センター北棟向かいに建設を予定している医学部百年記念館の建設予想図です。

同窓生が集える場として各種歴史資料の展示室や会議室、サロン等を設け、外観デザインは周辺建物等の環境との調和を図り、正面2階の窓を3連窓とし楕円形とするなど、重厚感のある建物となる予定です。

医学部創立100周年記念事業実行委員会  
医学部百年記念館小委員会副委員長  
吉岡 充弘 (60期)

## 同窓会費の納入は口座振替で

同窓会費の納入方法は、①口座振替、②コンビニ納入、③銀行振込のいずれかです。

**とくに口座振替は、店頭へ出向く手間が省けます。また、納入忘れがないのでとても便利です。**

口座振替を希望する方は、同窓会事務局にお申し付けください。  
電話：011-706-5007 E-mail：furate@med.hokudai.ac.jp

## 同窓会費納入のお願い

同窓会事業は会員の皆様から納入された会費によって運営されています。会費納入にご理解とご協力を切にお願い申し上げます。

## ご逝去者 新聞155号発行以降、ご連絡いただいた方を掲載しております。

御逝去年月日	氏名	期	御逝去年月日	氏名	期
平成27年			10月14日	佐藤 制一	27
11月 4日	永 渕 一 昭	29	10月15日	西 村 喜 夫	37
平成28年			10月22日	花 井 尚 志	35
1月23日	阿 部 守 邦	33	10月23日	塚 田 英 之	22
2月	長谷部 春 美	専2	11月12日	森 彪 彪	31
4月30日	小 池 忠 康	49	11月22日	高 畑 直 彦	33
8月 8日	浅 野 武 彦	27	12月 4日	岡 洋 瑚	43
8月 8日	関 谷 透	33	12月 6日	新 垣 盛 雅	51
8月23日	高 後 洋	41	12月10日	山 崎 勤	37
9月28日	辻 功	31	12月15日	黒 嶋 振 郎	31
10月 8日	鈴 木 侑 信	42	12月17日	久 富 隆	31

## 編集後記

明けましておめでとうございます。同窓会新聞第156号はいかがでしたでしょうか。たくさんの方々に記事を書いていただき、ありがとうございました。御覧のようにとても多彩な、盛りだくさんの内容となっております。これもひとえに、同窓会員の皆様が医療分野のみならず、多方面で活躍してい

る証左であり、日ハムの大谷選手の二刀流を思わせます。もしかしたら、今年のシーズンが大谷選手を札幌ドームで観戦できる最後の年かもしれません。その上、コンサドーレ札幌もJ1に昇格しています。時間を見つけては札幌ドームに足を運びたいと思います。今年も良い年でありますように。

(71期 田中 敏)

同窓会新聞は142号からHP上でご覧いただけます。アドレスは次の通りです。  
<http://www.med.hokudai.ac.jp/alum-w/news/index.htm>

印刷所 **大日本印刷(株)** 〒065-0007 札幌市東区北7条東11丁目1番1号  
代表(011)750-2205